



FRANÇOIS DURET

Dental Science
Person

世界の顔と声

ききて=編集部

This Month

日本が世界の CAD/CAM をリードする時代はそう遠くない。

Q：現在のお立場と研究の焦点を教えてください。

Dr. Duret：現在、南カリフォルニア大学の教授ですが、母国のフランスでも歯科診療を行っています。このフランスでの臨床では CAD/CAM を含む多くの機械を使用していますが、今基本的な診療にたちかえって

みようと考えています。

つまり歯科における数学的・自然科学的概念を研究したいと思っています。このような診療と研究によって私はかつて Duret システムといわれるようになった CAD/CAM システムを開発できたのだと信ずるからです。そういう意味で、今、

原点に戻ったということになります。

Q：CAD/CAM システムとして有名な“Duret System”の現状と今後についてお聞かせください。

Dr. Duret：1987年に第1号、第2号が1992年にできて、第3号の準備ができてきているところです。しかし、これらは、私にとって概念の機械的表現にすぎません。また、来年には“Duret System”の第3号が市場にでるはずですよ。

Q：CAD/CAM の困難な点は何でしょうか。

Dr. Duret：歯科医と技工士の反応です。歯科界には、このような機械を怖がる人がいます。これは、彼らがまだこの機械が臨床にどれだけ有用かを知らないからです。

以前は CAD/CAM の概念を説明し、技術的な問題を解決するために、歯科医と技工士に使用を勧めたものです。でも今はこれをしていません。人が理解するかしないかは私の問題ではないからです。しかし日本は全くの例外です。大学でのコンピュータ導入は日本が世界最初

です。これが私がなぜ3か月に1回は日本を訪れているかの答えになるでしょうね。

このように、コンピュータを含む考え方、システムに積極的にかかわろうとする日本人たちは、世界の歯科界にとってすばらしい存在だと思います。事実、日本の研究者、臨床家は、他のどの国よりも、コンピュータライズされたものへの理解が速いですね。

Q：クラウンの適合の目標はどのくらいに定めていますか。

Dr. Duret：25~50 μ mです。これ以上ではありません。

Q：クラウンには何を使っていますか。

Dr. Duret：コンポジット、セラミック、そしてチタンです。金や鉄は使いません。

Q：日本の研究についてどう思われますか。

Dr. Duret：世界のトップですね。5年前にはそうではありませんでしたが、いまではトップです。CAD/CAM でいろいろ開発しているようですし。去年、いろいろと大学を回りましたが、全ての大学に1部屋から3部屋、CAD/CAM の研究室がありま

した。これが日本の現実なんですよ。

今後、ますます CAD/CAM の研究が進んで、日本で開発されたシステムが世界の歯科臨床家に恩恵をもたらす時代がくることを期待したいですね。その時代はそう遠くないはずですよ。

Q：先生は生体材料とその加工の第一人者ですが、将来の材料に何を期待していらっしゃいますか。

Dr. Duret：近い将来、自動着色が組み込まれた材料が出ることを期待しています。金属の中に色素を入れて、レーザーで活性化するのです。これで10年から20年の間に、レイヤーセラミックは終わりになるでしょう。CAD/CAM の開発が進み、補綴物の90から95%はコンピュータで作製するようになるでしょう。しかも金属にしる、セラミックにしる鑄造というものが少なくなるでしょう。切削加工やその他の方法が主流になると考えています。インプラントはコンピュータで自動化されるようになるでしょう。しかし可撤式補綴物はどうなるかわかりませんが。

国際紳士録

François Duret, DDS, MD, MS, Ph. D(フランソワ・デュレ)
歯学、医学生物学、科学の3専門領域での研究に従事。
歯学部卒業後、歯周病学の大

学院課程で研究をおさめ、生理学および生化学の学位、医学における学位を持つ。23年にわたるレーザーホログラフィーとコンピュータ応用の経

験を持つ。歯科用 CAD/CAM システムに関する世界的な権威で、また南カリフォルニア大学の歯学部の主任教授でもある。